



2022 年度日本語教育学会支部集会予稿集

【関西支部】 2023（令和5）年3月18日／オンライン開催

2022 年度第 5 回支部集会【関西支部】

2023 年 3 月 18 日(土)13:00-16:00(受付開始 12:30)

Zoomによるオンライン開催

主催:公益社団法人日本語教育学会

参加費:500 円 (マイページ事前参加登録にてお支払いください) 定員:100 名

※ご参加予定の方は、[学会ウェブサイトのマイページ](#) から 3 月 10 日(金)までに事前参加登録(支払含む)をお済ませください。事前参加登録について詳しくは p.4をごらんください。

※事前参加登録をお済ませになるとマイページより予稿集をダウンロードできます。また、事前参加登録者には、開催 1 週間前よりメールにて当日の詳しい参加方法と、ポスター発表資料等を別途ご案内いたします。

◆支部集会日程◆

12:30	受付開始
13:00-13:05	開会のごあいさつ
13:05-13:45	ポスター発表(1 件)
13:55-15:55	ワークショップ 「日本語教育の参照枠についての理解と実践に向けて」
15:55-16:00	閉会のごあいさつ

【13:05-13:45】ポスター発表(1 件)

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.3、詳細はマイページよりダウンロードできる予稿集原稿をご覧ください。オンライン開催では 1 週間前からご案内するポスターを各自で事前にご覧いただき、当日のZoomでは発表者と質疑応答をいたします。

「コロナ禍における日本語学校のオンライン授業が学習者に与えた影響」

平田 真理子(日本文化教育学院)

石川 晶子(アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター)

福島 奈緒美(長沼スクール東京日本語学校)



【13:55-15:55】 ワークショップ

「日本語教育参照枠についての理解と実践に向けて」

開催趣旨

令和3年度に日本語学習、教授、評価のための枠組みである「日本語教育の参照枠」が策定されました。また、令和4年度より「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデル開発事業が進められています。今後日本語教育や学習支援の現場で、どのようなパラダイムシフトが起きるでしょうか。「日本語教育の参照枠」の言語教育観はCEFRにおける行動中心アプローチの影響を受けています。本ワークショップでは、参照枠の策定経緯を再確認し、「言語の使用者や学習者がそれぞれの社会で求められる課題遂行能力を育成する」*という行動中心アプローチの教育目標に向け、教師・支援者に求められる役割は何か考えます。本ワークショップが、「日本語教育の参照枠」への理解を深め、実践を振り返るきっかけになることを期待しています。*(「日本語教育の参照枠」の活用のための手引 より)

講師及び題目

松井 孝浩氏(文化庁国語課)

『「日本語教育の参照枠」策定の経緯及び今後の方針』

奥村 三菜子氏(NPO 法人 YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち)

「社会的存在と行動中心アプローチの視点から教育実践を捉え直す」

事前資料

・[「日本語教育の参照枠」報告](#)

・[「日本語教育の参照枠」の活用のための手引](#)

事前質問

講師への事前質問があれば、[こちら](#)からお送りください(3月10日締切)。

◆問合先◆公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL:03-3262-4291 FAX:03-5216-7552 E-mail:shibu@nkg.or.jp



コロナ禍における日本語学校のオンライン授業が学習者に与えた影響

平田真理子（日本文化教育学院）

石川晶子（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）

福島奈緒美（長沼スクール東京日本語学校）

1. はじめに

コロナ禍により、多くの日本語教育機関がオンライン授業への切り替えを余儀なくされた。2022年現在は実践報告なども整理され、教師目線でのオンライン授業に関する分析は充実しつつある。一方で、学習の途上で対面授業からオンライン授業へと前触れなく切り替えられた学生目線での分析はまだそれほど行われていない。そこで、コロナ禍の日本語学校においてオンライン授業で学習した学生にインタビューを行い、その分析を通してオンライン授業下の学習者側の心理状態及び学習者の心理面に与えた影響を明らかにすることを試みた。なお本稿では藤本（2019）に従い、ウェブコミュニケーションシステム（以下、ウェブシステム）を利用した遠隔授業を「オンライン授業」と定義し、そのうち所謂「同期型」で行われた授業を対象とした。またインタビュー対象3名は「学生」で統一する。

2. 先行研究

日本語教育を含めた外国語教育におけるウェブシステムを使った授業に関する研究は、2000年代中頃から現れる。当初は、ある程度のレベルに達した学習者を対象とした交流型の授業や、異文化コミュニケーション授業などの実践報告が主たるものであった。

初級のグループ授業での事例については、藤本（2019）がウェブシステムを使った初級レベルでの「教えにくさ」に着眼し、担当教師へのインタビューを実施している。その結果、システム由来のトラブル以上に、対面授業をそのままオンライン授業に置き換えることによる無理が「教えにくさ」につながる可能性が示唆された。

対面やオンラインに限らず、教室観や相互行為といった学習者の自己形成に係わる研究では、寅丸（2014）が教室活動の意味と「日本語に対する劣等感」を払拭する過程に「話者役割」の変化に係わると述べている。さらに学習者心理に影響する教室内環境については、泉水（2013）がラポール構築の必要性を主張している。

3. 日本語学校でオンライン授業を受けた学生へのインタビュー調査

3.1 予備調査

インタビュー調査に先立ち、留学生として日本語学校に在籍する学習者を対象にオンライン授業の印象や影響を聴取する定量調査を行った。主な質問項目は、属性、オンライン授業での読解、聴解等の各授業の印象、心身面、学生同士や教師との交流面への影響、オンライン授業と対面授業の支持・不支持などである。この調査の結果、オンライン授業への

支持・不支持に、国籍および学習レベルが関係することが明らかになった。特にベトナムとネパール国籍の学生にはオンライン授業への不支持が多く、中国の学生には支持が比較的多いことが示された（福島他, 2021）。

3.2 調査方法および分析方法

予備調査を受けて、オンライン授業下の学習者側の心理状態及び学習者の心理面に与えた影響を明らかにするため、予備調査協力者の中からネパール、ベトナム、中国の学生各1名（以下、学生A, B, C）に、オンライン授業に切り替わった時の学習の様子や印象について半構造化インタビューを行った。インタビューは対面とウェブシステムを使用したオンラインの2形式で、それぞれ1時間程度行った。

インタビューの分析には、大谷（2008）をもとに SCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いた。大谷（2008）に従い、インタビューのテキストデータをマトリクスの中にセグメント化し、後に示す表のとおり左から、<1>データの中の注目すべき語句<2>それを言い換えた語句<3>それを説明するためのテキスト外の概念<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えた。その後、<4>からストーリーラインを記述し、そこから理論を導き出した。本調査対象は学習途上の非母語話者であり、データをそのまま切片化しコーディングする分析方法では意図が伝わらない恐れがあったため、コーディング過程で<2><3>を記述する過程がある SCAT が有効と考えられること、また比較的小規模の質的データの分析にも有効であることの2点を考慮し、これを使用することにした。

分析の手順は、まず学生A, B, CのインタビューデータをSCATで分析し、各分析結果をもとにストーリーライン及び理論的記述を行った。次に、ストーリーラインと理論的記述をもとに考察を行った。次の表は実際のSCAT分析で作成したものを抜粋したものである。

表 SCAT 分析・学生B（一部抜粋）

番号	テキスト +<1>テキスト中の注目すべき語句 (下線部)	<2>テキスト 中の語句の 言い換え	<3>左を説明す るようなテキ スト外の概念	<4>テーマ・構成概 念（前後や全体 の文脈を考慮して）	<5>疑問・ 課題
10	その、「よく話せます」は誰と話せますか。				
11	〇〇さん（※注 クラスメイト）と話せます。例えば〇〇さんと話せます。友達と話せます。先生と話せますとか。自分の国について話せます。（何について？）国について、自分の国について話せます。（1）でも ZOOM で勉強したら、休憩時間ずっと話さない。みなさん静かだから。	・対面授業の好きな点は、先生や友達と話せること ・オンライン授業では休憩時間に話さない。	・オンライン授業の閉鎖性、授業時間以外の交流時間の消滅 ・孤独感	・オンライン授業の閉鎖性	・学校側が休み時間に話す仕組みを作れば改善するの か？ 学習者側はあくまで受け身
24	オンライン授業と対面授業はどちらも同じですか。				

25	<p>例えば先生はパソコンで漢字... (パソコンで?) パソコンで漢字と文法を勉強するのは... 先生ちよっと考えますよ。例えば、<u>学校で勉強したら漢字と文法をもっとよくわかります</u>。例えば漢字を見せたあと、<u>すぐ先生を聞きますとかすぐ書きます</u>。間違ったところはすぐ直すことができます。<u>文法もすぐ勉強した後すぐ使います</u>。それでよくわかると思います。でも(1)<u>ネットで勉強したら、先生は漢字を読めるだけ、まだ練習していないから</u>(2)<u>書き方とか文法はまだ練習するからよくわからないと思う</u>。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対面授業では漢字と文法はもっと理解できる ・ 対面授業では勉強後にすぐ練習できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対面学習の即時性 ・ 対面授業の学習効果：学習と実践が同じ空間で行われる ・ オンライン授業での練習量の不足 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教室授業の役割 ・ 教室授業の学習効果 ・ 教師との交流が学習に与える影響 ・ 学校側の ICT 問題 ・ オンライン環境においても、教師の一方的な説明過多にならず、学習と実践の繰り返しを効果的に実施する方法の模索 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師との交流が学習に与える影響 ・ ラポール形成の学習効果
----	---	---	--	---	--

4. インタビューの分析

4.1 学生 A の分析

学生 A は、入学から半年後の 2020 年 4 月半ばから約 1 か月間、初めてオンライン授業受講を経験した。オンライン授業中の日本語学習レベルは初級前半から後半で、日本語以外の受講科目はなかった。使用デバイスはスマートフォンで、インターネット環境は時折速度に問題がある程度であった。オンライン接触状況は、何かを調べる際に動画や検索サイトを閲覧し、YouTube に動画投稿経験があるなど、ある程度慣れている。

A のインタビューでは対面授業への評価とオンライン授業受講の難しさが何度も言及された。まず学習面において、A は対面授業とオンライン授業とでは「わかる」という感覚に違いが出ると感じている。次に教師との関係性の面では、教師側と学生側との理解度の共有が難しいと指摘している。他にも教師からの問いかけに対し、「理解完了」のレベルを下げた状態で「理解した」と報告する、または理解したふりをするとしている。3 点目に、オンライン授業の受講において、自己の自制心の弱さを感じ、そこへの反省点が精神的なストレスにつながっていると感じている。4 点目には、通信環境と使用デバイスの問題など、物理的な環境不全の面で、学習への理解度の低下、日本語能力の習得度合いに不安を感じている。ただ、教材資料が見やすいのはオンライン授業であることや、オンライン授業の受講を経験できたことは意義があったと認識している。

以上のことから、教師と学生との認識の齟齬と閉鎖的なオンライン授業の状況からオンライン授業への不支持へつながっていったと推測できる。特に A は、本人が最適な形態ではないと感じるオンライン授業に対して、その授業方法を選択した学校側に検証の必要があると説いている。また対面授業を支持する言及内容から、クラスメートだけではなく教師との相互交流を通して、ラポール形成による学習効果を再認識が見てとれる。

4.2 学生 B の分析

学生 B は、インタビュー時点で日本語学校での学習歴が 1 年半以上であり、初級から中級に至るまで、ほぼオンライン授業で学習している。自国でインターネット学習がそれほど普及しておらず、コロナ禍前にはオンライン授業はもとよりインターネット上の教材を

使用した自学習を含めたオンライン学習経験もほぼなかった。しかし、コロナ禍での来日後からインタビュー時に至るまでは、YouTube, Facebook, TikTok 等を利用するようになっており、日本語学習にも活用している。授業時のデバイスはスマートフォンのみ、WIFIの性能は良好ではないことがあり、デバイスの共有はしていない。

B のオンライン授業に対する印象は否定的なものが多い。まず学習面において、対面授業時と違い他の学生が静かだと周囲と話さない、適切なタイミングで教師に質問できない、授業を速く感じ、自分がわからないときに教師が拾ってくれない等がある。音声不良やデバイス画面の小ささによる文字の見にくさ等から、オンライン授業は不便であり対面授業のほうが良いとするが、その認識はあくまで自分が主因だとも付け加えている。教師や他の学生との関係性においては、他の学生との交流が減ったことだけでなく、教師が画面越しになったことで視線を遠く感じ、集中できないと感じている。さらに、カメラオフ時には他のことができってしまうことが罪悪感を誘発しているようである。学生Bにとってオンライン授業の受けにくさは、学生Aと同様にオンライン授業を閉鎖的だと感じていることから生じていると思われる。

4.3 学生Cの分析

学生Cは母国で9か月オンライン授業を受講、その後日本に入国し、週5日のオンライン授業を2か月、その後1か月間週2日のオンライン授業を受けていた。オンライン授業開始時の学習レベルは中級以上であり、初級レベルのオンライン受講経験はない。日本語以外に数学と理科のオンライン受講経験がある。使用デバイスは、最初はスマートフォンであったが、画面が小さく見づらかったためPCに切り替えた。日常的にネット検索やオンラインゲームをする等ICTに慣れている。

学生Cは、当初オンライン授業に対して不安を感じていたが、受講するうちにその利便性を実感し、オンライン授業を支持するようになった。オンライン授業の利点としては、時間の節約とそれによる生活環境の変化、チャット機能による質問のしやすさ、周囲の視線や緊張感からの解放による気楽さを挙げていて、C自身が個人主義であるためオンライン授業に向いているのではと自己分析している。また、理解のしやすさと授業形態には関連がないとの認識である。その一方でオンライン授業の欠点にも言及しており、身体的ストレスや集中力の持続困難さを再三指摘している。また、インターネット環境による音声の問題から、特に聴解の授業への影響を感じている。それから、会話の授業では会話の実感が得られないとし、会話力養成への影響も感じている。他の学生や教師との関係性においては、特に話好きな学生にとってオンライン授業は孤独を感じるものだと述べている。

対して、対面授業については、同年代の人との協働学習が促進する創出・産出意識と学習効果を感じている。特に前述の会話の実感の必要性を挙げ、対面授業にはこれがあると述べている。また、教室空間における競争相手の存在によっても学習効率が上昇すると考えており、特に聴解の授業においてそれを感じている。

5 考察

以下、特に学生に影響を与えたと思われる要素2点を取り上げ、考察を進める。

5.1 教室空間の共有の欠如

木原他 (2005)は、オンライン授業に対する教師の意識調査において、オンライン授業では場を共有していないという感覚、距離感があるという問題点を指摘しているが、今回のインタビューの分析から、学生の側でも「教師やクラスメートと教室空間を共有していない」こと自体がオンライン授業に対する不満となっていることがうかがえる。学生Bは教師が自分を直接見えていないことにより自身が授業に集中できなくなったこと、教師が自分の学習状況を把握できていないのではないかという不安感について、また学生Cは空間共有がないことによる競争意欲の低下とそれに伴う効率の低下について述べている。このように、教室授業には存在する「クラスメートの様子が直接的に見えること＝」空気が読める「」機会の欠如により、発話意欲の減少や自分だけができていないのではないかという不安感の増幅、競争意欲の低下が起こっている。クラスメートや友人との交流機会の減少による学生側の不満はオンライン授業を設定するに当たって容易に予想できる点であったが、クラスメートや教員と同じ空間を共有していること自体が学習意欲につながることを学生が認識している点は新たな発見であると言えよう。

Dörnyei, Z & T. Murphey (2003) のラポールを強化する 11 の要因の中に「近接感 (物理的距離)」と「接触」があるが、そもそもコロナ禍においては「近接」、「接触」を避けることが推奨され、オンライン授業に切り替えた学校が多くあった。この点から考えれば、オンライン授業にこの 2 つがなくその結果ラポールの強化ができにくくなっているのは当然のことと言え、オンライン授業でラポール構築の強化が求められる。

5.2 オンライン授業の持つ閉鎖性

以下の 3 点において、オンライン授業の持つ閉鎖性が浮き彫りになった。

1 点目として、オンライン授業では、対面の教室授業と比較し、質問や発話のタイミングを掴めず困惑することが多い。インタビューで度々言及された発話・質問の困難さは、教師の授業の流れを断ち切ってはいけないという気遣いによるものの他に、心理的なストレスから生じるものもある。また休憩中の学生同士のコミュニケーションも、個人の会話が「クラス内という公の空間」にさらされることを避けたい気持ちにより阻害されていると推測できる。現代の学習者にとって、周囲の学習者の様子が見えその場の雰囲気や拘束感が自己の行動を決める重要な要素となっていることが示唆され、これができないことがオンライン授業における孤独感を生んでいると思われる。

2 点目として、授業内容によっては現実の場面とかけ離れた練習方法がとられ実感が得られにくいことがある。モニター越しという慣れない環境下にもかかわらず、授業内容は以前と同様である場合、学生は現実の場面とかけ離れているといった違和感を覚えるようである。寅丸 (2014) は「ことばの力を育む土壌となるのが教室活動における相互行為の質」と述べ、「相互行為の質を担保することが教師の重要な役割」、「他者と間主観的に日本語の意味世界を共同構築できるような相互行為の質が重要」と述べている。産出系の科目である会話の授業は経験を得るための場として捉えられることから、オンライン授業では相互行為の質の担保が難しいことが推測される。今回のインタビューで「閉じられた教

室環境」に変化した学習環境で、いかにこの「相互行為の質」を担保するかという問題が浮き彫りになったと言える。

3 点目として、自律学習能力に対する学生自身の気づきがある。その場に教師がいないことによる学生の授業参加意欲の減退について、学生が目線でオンライン授業時に自身の弱さが露呈したという、言わば教師へ罪悪感を込めて自己分析している。3 名とも授業中に授業と関係ない行為がしやすいことが“オンライン授業の欠点”だと言及したことが、学生の心情をよく表している。授業中につき居眠りや内職をしてしまうということはオンライン授業でなくても起こりうることではあるが、オンライン授業が学生自身の自律学習能力の欠如に向き合う好機となったとも言える。

6. まとめと今後の課題

今回の調査からオンライン授業の持つ特性でとりわけ学生への影響が顕著だったものとして、「教室空間の共有の欠如」と「閉鎖性」が認められた。前者は、集中力・競争意欲の低下および不安感の増幅、学習意欲の低下につながり、後者は、質問や発話の躊躇、人との交流の実感が得られないことにつながる事が認められた。また、自律学習能力の欠如に対する気づきに関しては藤本（2019）の通常の対面授業をオンライン授業にそのまま置き換える問題点がここでも見られた。これらの結果から、今後も続くと思われるオンライン授業をより学習効果の高いものにするために、オンライン形態でのラポール構築の促進方法、また学習意欲を低下させる「オンライン授業の閉鎖性」の解消が急務であることが明らかになった。しかし具体的な方策の提案には至っておらず、引き続き学習者への意識調査をもってより詳細にオンライン授業の方向性を明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

- ・大谷尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 54 巻 2 号』
- ・木原郁子，板橋貴子，河住有希子，高邑真弓（2005）「遠隔日本語教育の一試み—ビデオ会議システムを用いた授業—」『日本語教育方法研究会誌』12 巻 1 号 pp. 6-7
- ・泉水康子（2013）「支持的教室風土をめざして—ラポール構築のための教室環境整備—」『早稲田日本語教育実践研究 = Waseda practical studies in Japanese language education 巻 1』 pp. 65-73
- ・寅丸真澄（2014）「教室活動における相互行為の質とは何か -学習者の自己認識・他者認識の変容に着目して-」『早稲田日本語教育学第 14 号』 pp. 1 - 25
- ・藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究」『日本 e-Learning 学会誌 Vol. 19』 pp. 27-41
- ・福島奈緒美，石川晶子，平田真理子（2021）「オンライン授業に対する学習者の意識調査—日本語学校を対象に—」『日本語教育方法研究会誌』27 巻 1 号 pp. 142-143
- ・Dörnyei, Z & T. Murphey (2003) Group Dynamics in the Language Classroom. Cambridge: Cambridge University Press.

公益社団法人日本語教育学会

支部活動委員会

委員長：橋本直幸

副委員長：國澤里美・嶋ちはる・永井涼子

委員：新城直樹・井上里鶴・内田さつき

御館久里恵・雁野恵・菊池哲佳

木下謙朗・島崎薫・世良時子

高橋志野・田川恭識・中河和子

中東靖恵・平田未季・深川美帆

松尾憲暁・元木佳江・山路奈保子

山本裕子・ルチラ パリハワダナ

審査・運営協力員

荒井智子・池田玲子・内山喜代成

福良直子・宮永愛子

公益社団法人日本語教育学会

2022年度第5回支部集会【関西支部】予稿集

発行 2023年2月3日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <https://www.nkg.or.jp>